

授業概要

文化人類学がひとつの学問として誕生してから、一世紀あまりしかたっていない。しかし、文化人類学が今日的な意味での学問分野として成立するまでには長い歴史があった。この歴史的経緯を振り返るとともに、文化人類学の確立に多大な影響を及ぼした学者たちの業績と、彼らが唱えた理論を各回の授業のなかで講義する。とくに、文化人類学はアメリカ合衆国を中心に発展したため、このコースでもアメリカにおける文化人類学を中心に据えていきたい。学生一人ひとりに「大学で学問することの意味」について自問自答してもらうために、授業では随時ディスカッションやグループワークを織り込むことを計画している。あわせて、本コースで得た知見をもとにリサーチペーパーを書き、それを学期末に発表してもらう予定である。授業への積極的な関与を期待する。なお、学生の興味関心や履修者数によって、授業の進め方を適宜調整していきたい。

授業計画

第1回	オリエンテーション：コースの紹介、授業の進め方、課題の提出、評価の方法など
第2回	イントロダクション：文化人類学とは？
第3回	文化人類学の誕生（1）：進化主義：モーガンとタイラー
第4回	文化人類学の誕生（2）：伝播主義と文化圏：リバーズ、ウィスラーらを例として
第5回	ボアズと人類学：米国における人類学の成立
第6回	米国におけるボアズ学派の台頭：クローバー、ベネディクト、サピアー、ミードらを例として
第7回	マリノフスキーと機能主義、ラドクリフ-ブラウンと構造機能主義
第8回	ポスター・プロジェクト発表会
第9回	デュルケームと社会学、モースと贈与論、レビ-ストラウスと構造主義
第10回	新進化主義の台頭：ホワイトとスチュワード
第11回	ポスト・モダン人類学：ギアツと解釈人類学
第12回	文化人類学とエスノグラフィー：参与観察
第13回	現代の文化人類学
第14回	プレゼンテーション（1）
第15回	プレゼンテーション（2）
第16回	期末試験

到達目標

1. 文化人類学の成立と発展について概略を説明できる。
2. 文化人類学における代表的な諸理論と提唱者について理解を深める。
3. 文化人類学的な見方を応用して、私たちの現代世界を自ら読み解く姿勢を養う。

履修上の注意

大学生としての自覚を持ち、自らの責任を果たすこと。ここでいう「自らの責任」とは、授業に出席し、積極的にディスカッションやグループワークに参加し、そして提出物を時間厳守で提出することである。単位は与えられるものではなく、自ら取りに行くものである。

予習復習

その日の講義で扱うテーマについて、自分なりの理解や問題意識をもって授業に臨むこと。そのためには、テキストを前もって読んでおくことをお勧めする。また、授業後には、学習した内容について友人らと積極的に話し合い、理解を深めること。それにより、学期末のプレゼンテーションおよびリサーチペーパーがより良いものになるはずである。

評価方法

A. 授業参加姿勢（20%） B. ポスター・プロジェクト（10%） C. リサーチペーパー（25%） D. グループワークおよびプレゼンテーション（20%） E. 期末試験（25%） *変更する場合がある。授業中に指示する。

テキスト

- ・教科書名：文化人類学の歴史：社会思想から文化の科学へ
 - ・著者名：M.S. ガーバリーノ 著、木山英明・大平裕司 訳
 - ・出版社名：新泉社
 - ・出版年（ISBN）：4-7877-8716-0（1987年）*異なる版でもかまわない
- くわえて、授業のなかでも適宜、参考文献を紹介したり、資料を配布したりする。